

印象 11 編-2022 年 3 月の総評に代えて

○林 桂○

*新たに 2022 年度年募集期のはじまりである。前期末 2 月の投稿数からは落ちついた編数になった。とは言え 3200 編を超えて活況を呈している。確実に投稿数、投稿者が増えている。レベルも上がっている。既にお気づきの方もいるだろうが、年度変わりを期に佳作の選考基準を少し厳しく設定し直した。選考基準がぶれないように維持するのは選考者の責務と思うので、ここに明示しておきたい。

●柰いう子●（佐賀県）

花吹雪カバの背に張りつきたがる

【評】動物園のカバ。水の中にいることが多い皮膚は濡れていて、桜吹雪の花びらが張りつきやすいのだろう。いにもカバ、という表現になっている。「桜散るあなたも河馬になりなさい」と書いた、カバ好きの坪内稔典が喜びそうな作品だ。

●来栖 優●（宮城県）

きのこ

たけのこ

きのこ

たけのこ

【評】これを本当に佳作と思うのかと詰問されれば、答えに詰まるかもしれない。しかし、これに「詩句」を感じた作者の感性には惹かれる。私などにはない感性だ。繰り返し口ずさむと心地良く、何かのおまじないの言葉のように響いてくる。

●上 峰子●（東京都）

ミトコンドリアがいる。

いや、いてくれる。

【評】本来バクテリア由来のミトコンドリアは、私たち生命と一体化して、遺伝情報の一部とまでなっている。かつ、私たちにとって欠くべからざる存在である。「いてくれる」は、そんな思いだろう。

●長谷川柊香●（宮城県）

ゲーセンに卒業の花抱え入る

【評】卒業式で貰った花束。部活の後輩からの贈り物だろうか。それを持ったまま、ゲームセンターに寄るといふのだ。しばしの開放感と、猶予感に浸っている。

●小林奔●（神奈川県）

洗顔を忘れて布団に入ったら

夢の中でもふたえのわたし

【評】化粧として二重瞼に整えている。化粧を落とせば一重に戻る。あるとき、二重のまま眠ったら、夢の中の自分も二重だったというのである。意識の文脈の不思議さ。浅香甲陽に「春眠の夢の中なる吾も癩」という句がある。ハンセン氏病で夭折した俳人である。夢は現実に束縛されてるのだ。

●高々●（愛知県）

にわか雨、象の尻が濃くなる

【評】水に濡れた象の皮膚は、色が濃くなる。俄雨に、お尻だけ

濡れているのだろうか。象の皮膚のありようをよく伝えている。

●浅葱●（愛知県）

喉仏の骨の形も知らないで

祖母と唄った

昨日までは

【評】骨を壺に収めるときに、喉仏は大切な部位だ。最後に一番上に収められる。「仏」という名前がかかわってのものだ。

●細村 星一郎●（東京都）

まばゆさを使い切ったら鳥になる

【評】美しい作品。中村草田男の「乙鳥はまぶしき鳥となり^{つばくろ}にけり」を想起させる。

●早川 のり●（東京都）

トントン拍子にポンポンポン

だんだん畑にデコポンポン

【評】子どもの言葉遊び歌を思わせる。やはり2行目に出現する「デコポン」が秀逸。遊びの所作まで見えてきそうだ。

●tae●（福島県）

私たちの青春時代ってさ
ポジティブ信仰流行って
辛かったよね

【評】判断基準は、ポジティブかネガティブか。ポジティブを無条件によいものとする。全てをこの基準に合わせるのは辛い人が多数いるに違いない。それも「信仰」の収まった今になって、言える言葉なのかもしれない。

●佐藤潤華●（神奈川県）

関ヶ原の戦いか
壇ノ浦の戦いか
迷ったの
後ろの女子高生が言う

【評】女子高生が、バスの後部座席で、今日受けた日本史の試験

を話題にしているのだろう。戦いの内容を知っている作者には、迷う余地のない問題だろう。しかし、言葉としてだけ知っている彼女達にしてみれば迷いどころなのである。何も知らないんだという蔑みではない。むしろ、知識の入口にいる初々しさに、作者は感じ入っているのである。